

# 『ソモト・エモーショナル・リコール&リリース』

## 関連資料（2）

引用・出典

◆ソモト・エモーショナルリリース 体性・感情・解放とその向こう  
ジョン・E. アプレジャー（著）34～57頁

2.

エネルギー嚢と  
ソマト・エモーショナル  
リリース  
最新版1990年

## I. エネルギー嚢

外部誘因による傷害のほかにもエネルギー嚢の原因となるものがあるかどうかという質問は、この主題についていつも出てくるものだ。つまり、感情や、精神的な葛藤、寄生虫、バクテリヤ、ウイルス、毒、栄養不良や、遺伝子などはエネルギー嚢を作る要因となりうるか、というものだ。それに対する答えは私の独断的なものにならざるをえないだろう。外部誘因によるトルウマ(傷害)の結果に関する多数の観察から、エネルギー嚢概念は出てきたものだ(カルニおよびアプレジャー)。傷害エネルギーが体の中に注入され、それがエネルギー嚢の原因となる、という形であらわれてきたのだ。最後の章にエネルギー嚢についての詳細を記述したので、ここではそれは体のなかに残ったエントロピー(熱力学で物質の無秩序性を示す量)の増大した局部領域のことだといえば十分だろう。増大したエントロピーというのは、体が処理できうるベストをつくした上でなおかつ混乱し分裂したエネルギーのことだ。

しかしながら、エントロピーの増大した局部領域の唯一の原因となりうるのが外部からの身体外傷だといっているわけではない。今までの例をみていると、それはむしろ患者の身体的外傷の残滓になるものようだ。私達はこの残滓を“エネルギー嚢”と呼んだ。

エネルギー嚢を体の外部から外傷的に誘因されたものだとして排他的に定義するのはたぶん時代遅れなのかもしれない。いまではエントロピーが増大した領域(エネルギー嚢)は広範囲な問題によって起こるものだということを私は確信している。それどころかこのエネルギー嚢は、感情が起因したもの、これは中毒によるもの、カルマから出たもの、ウイルスによるもの、外傷によるものなどと正確に区別し話すべきだろう。そのエネルギー嚢の元となるものや原因などを出来る限り明確にすべきなのだ。外傷的に起こされたエネルギー嚢をリリースするには当時の正確な体位置を探しだし、それを維持するという方法が多分ベストだろう。その他のタイプのエネルギー嚢はエネルギーの方向や意向、ソマト・エモーショナル・リリースなどを使うことによってリリースされうるだろう。

エネルギー嚢はいろいろのやり方で見つけられる。時には患者が痛む場所を差し示すのを見ていればよいというような簡単なものもあるが、この方法にばかり頼ることのないように、この患者は関連痛や、あるいは二次的な関節障害を被っているのかもしれないのだ。エネルギー嚢はそこを通っている経絡に沿ったエネルギーの流れを妨害することもある。そうすると、それに関連した内臓や、その経絡に沿ったとんでもない場所に痛みを引き起こすことにもなりうる。だから痛む場所にエネルギー嚢があると決めるわけにはいかないのだ。

エネルギー嚢の場所を探知するには、アーキングが最適の方法だろう。アーキングというのは、患者の治療時にセラピストとしての私は何をしているのかを(カルニと著者が)探る目的で行われたリサーチから出てきた概念だ。その時点では、私は直感的に“アーキング”をしていたに過ぎなかった。カルニ博士が私に何をしていたのかを記述するように、と詰め寄り博士がそれを物理的センスのあるものにうまく置き換えたという訳なのだ。

膨大な観察と討論を交わしたあとで、私の手は明らかに“活動中の傷害”から放出されたエネルギーを知覚していて、それがエネルギー嚢だったという結論に達した。エネルギー嚢のエネルギーや、

その他どんな“活動傷害”のエネルギーとも同調したときに治療者が手を通して感覚するものをうまく描写するために、私達はそれに“アーキング(円弧)”という名をつけた。

エネルギー嚢というのは、まるで無数の同心円を描きながら回転様に振動しているものの中心ポイントのようだ。どの円のどの部分のポイントをとっても小さい弧を描いていて、ちょうど振り子の真中部分が球体の中心にくついていて、終わりのない振り子(球体の半径)が動いているような感じで、左へ右へと動いているのだ。この振り子は重心を無視して動いている。エネルギー嚢本体と、セラピストの両手の間の距離が違ってくるものだから、アーキングの評価をするときに、それぞれの手は少しづつ違った弧(アーチ)を感じることになる。(焦点の中心となるものが、両手から均等距離にあることも時にはあり、他のものと混乱しかねない。そのときは手をずらして別の場所に移すこと)問題は、それぞれの手で感知した弧に共通の中心となる付着点はどこかを探りだすこと、この二つの弧の真中を伸ばすとどこで重なりあうかを探りだすことにある。

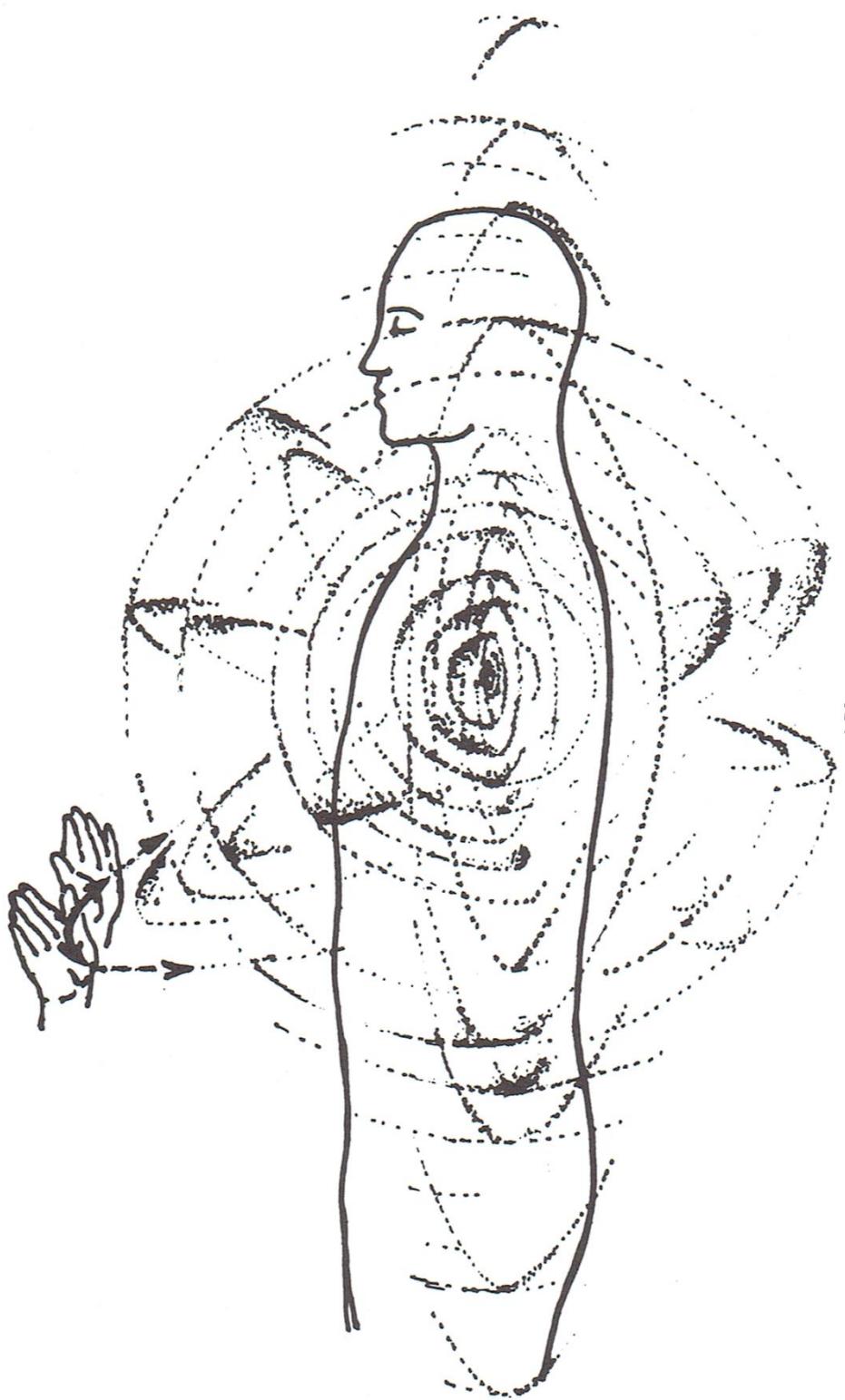
これらの球体は体に触れていても、触れていくなくても分かるものだ。一つの中心から出ている同心円球体は無数にある。だからエネルギー嚢からどのくらい離れていようが構わない、ともかくこの“アーキング”の活動は感じる。

ここで、エネルギー嚢から出てきたこのエネルギーの波を、静かな池の表面に小石を投げたときに表れる波の輪と同じものとして、二次元的に考えてみよう。池の上に自然にできるスムーズな波の活動を、頭蓋仙骨リズムとして考えることもできる。この小石を投げ込んだとき出来る波は、自然の波を打ち消すような形でその上に出てくるもので、我々がアーキングとよんでいる現象もそのようなものだと考えてもよいだろう。



図 II - 1

同心円は、池の中心に投げられた小石が起こした波を示す



図II-2

中胸部にできたエネルギー嚢の、回転様で振動しているエネルギーを手で感知する。アーキングは体の上でも、離れたところからでも知覚できる。テキスト参照。

これまでの私の経験では、エネルギー嚢の回転様の振動率は、一貫して頭蓋仙骨リズムよりも早い。しかし心臓の脈拍よりはゆっくりしている。そして患者の呼吸には影響されないようだ。

エネルギー嚢を見つけだし、その位置を確認するというアーキング・システムは、1976年カルニ博士と私がその方法を開発してから目に見えるほど変化はしていない。距離感覚を誤ったり、エネルギーが流れていく導体の密度に邪魔されさえしなければ、体のどの部分にでも両手を置き“アーキング”をすることで、体のどこにエネルギー嚢があるかを知覚することができる。

患者の体の上、あるいは体から離れたいろんな場所で、アーチの巾が段々と小さくなっていくような手の位置を見つけだすことでエネルギー嚢に“焦点を合わせていく”手がアーチの焦点の真上(エネルギー嚢)にくると、左、右と小さな巾で振動する回転花火のようなものを感じるだろう。振動率は、上は心臓の鼓動から、下は頭蓋仙骨リズムのパラメーターの範囲内までいろいろある<sup>9</sup>。

みんなも知っているように、筋膜の滑りや、頭蓋仙骨の動きの調和／不調和、からもエネルギー嚢を探知することができる<sup>10</sup>。ただこの方法だと、筋膜制限の原因となる他のものをも探知することになってしまう。例えば動きに制限があったとしても、それは過去に問題だったものの癒着残滓かもしれないし、筋肉の不均衡か、ポケットの鍵や財布かもしれないのだ。だから自分の発見したものをあまり過大に解釈しないほうがよいだろう。エネルギー嚢を含む活動的な問題を発見するには、今のところアーキングが最も信頼のおける方法だ。

流れの滞った経絡を触診していくと、その経絡の妨害となるようなエネルギー嚢を見つけることになるかもしれない。しかし、その滞った経絡は昔の問題の残滓からきたもので、今は不活動なのかも知れないのだ。虚の経絡や、過度に実な経絡を感じたときは、その経に沿って、エネルギー嚢が存在していないかどうか探がしてみるというのも試してみる価値があるだろう。エネルギー嚢が見つかったならば、それに近づくごとにアーキング活動を感じるだろうし、また熱や、焦点のエネルギーが増大したために起こる異質なセンセーションを感じるかもしれない。

もし中国脈診ができるなら、最初に脈をみて問題経絡を探しだすのもおもしろい。それからその経絡をすべて(届く限り)触診し、エネルギー嚢による妨害があるかどうかを探知する。もしあれば脈をモニターしながら矯正する。エネルギー嚢がリリースされるとともに中国脈も正常に変化していく。

9. アーキングの概念およびテクニックは、アプレジャー・ブレデヴォー共著“頭蓋仙骨治療(I巻)”の244~245頁から249~250頁、アプレジャー著“頭蓋仙骨治療—硬膜を越えて(II巻)”の216頁に詳しく載っている。アーキング評価を修得するには頭蓋仙骨治療ワークショップのレベルIIの実習に参加するのがベストな方法だ。

10. 他にも、頭蓋仙骨治療で使用される体全体の評価のための方法はアプレジャー・ブレデヴォー共著“頭蓋仙骨治療(I巻)”の14章と、アプレジャー著“頭蓋仙骨治療—硬膜を越えて(II巻)”の4章に全て記されている。こういったテクニックをいかにハンズオン手当で応用できるかは頭蓋仙骨治療ワークショップのレベルIIで指導されている。

もしそのエネルギー嚢をリリースする間、脈をモニターするのが物理的に無理ならば、次善の策としてリリースが終わったあともう一度脈をチェックすること。その過程はフォローできないことになるが、少なくとも自分の施した治療がもう一つの身体システムにどういう効果を及ぼしたかを感じることはできるわけだ。

このオリジナルな治療法に関する私の臨床経験からみてみると、エネルギー嚢というのは、痛みという形をとて機能障害を引き起こすだけでなく、促進分節を形成する原因になることが多々あった<sup>11</sup>。このまま進めば、特定の内臓の疾病を引き起こすことにもなるわけだ。エネルギー嚢が直接の原因で、あるいはそれによって起こった促進分節からくる内臓疾患がどれくらいあるかは計り知れないほどだ。

エネルギー嚢の中には否定的な感情が残っているかもしれない、それが個人全体にも影響を与えるようと思われる。エネルギー嚢に含まれた怒りの影響で、個人の人格全体が怒りっぽくなっている、と思われるようなケースを今まで何度も見た。他にも、破壊的な感情となりうる罪の意識や恐怖などもそれにあてはまるだろう。

エネルギー嚢が特定のところにできたために、チャクラ(エネルギー・センター)の機能障害を引き起こした例もある。本人は何年にもわたってチャクラをオープンしようと試みたが、矯正した先から、そのチャクラあるいは他のチャクラが機能障害を引き起こす、といった患者を何人も見てきた。そんな患者達はチャクラの機能を継続して良好に保てないのは、何か自分に靈的な欠陥があるからではないか、と自分たちを責めだすかもしれない<sup>12</sup>。こういうふうに自分を責めるのは正当ではないし、それにその問題もエネルギー嚢をリリースすることで矯正される。

エネルギー嚢に関して、カルニ博士と私はまず仮説を設けた。それは、エネルギー嚢が存在すると、筋膜系内で微電流とエネルギーの正常な流れを乱すことになるというもので、私自身は今でもそうだと感じている。私達はこの概念をもっとつっ込んで研究する予定だった。博士は彼の友人とともにマサチューセッツ工科大学の遮断室を使う予約もとっていた。測定機を使ってこの電流から出る磁場のマッピングをすることによって、人間の体に流れている微弱電流の流れのパターンを測定しよう、少なくとも例証しようとしていた。カルニ博士は招待教授として3年間ミシガン大学を訪れていたが、それが終わるとイスラエルへと呼び戻された。その後、教授は訪問許可資格を更新出来なくなり、研究は中断され、この段階の研究を完了することができなかった。ミシガン州のポンティアックにあるオーバーランド大学で磁場を測定し、地図を作る試みはやってみたが、その遮断室は質的にもうひとつだった。

現在のところ、リリースに好適な位置や治療位置へと体が動いていくのをフォローする、という以外にエネルギー嚢の効果的な治療方法を私はまだ見つけていない。患者の体自身が、何をするのが一番ベストか、というのを常に知っているようなのだ。ただ患者の中に、現状を保ちたいという部分があると、それが治療の問題や障害になるように思われる。

11. 促進分節の概念と過程の記述は脚注7を見ること

12. チャクラーアブレジャー著 “頭蓋仙骨治療—硬膜を越えて(II巻)” 229～230頁を参照。

わたしたちは、この部分の感情を損ねることなく、患者の中には、このエネルギー嚢から自由になりたいという部分もあるのを見つけだし、それを支持するようにしなくてはならない。なんといってもそのどちらの部分も患者にとってベストだと思われることをしているのだから。

“エネルギー嚢”に関連したことで、このような矛盾があるときには、患者の体が、早く同じ動きを繰り返し、もう少しして“治療位置”かというところまでいったかと思うとスピードをあげてそれを通り過ぎたりするので分かる。このような早い動きが始まったら、その動きを数度フォローし、パタンをみるとるように私はアドバイスしている。それからその動きをゆっくりにする。つまり動きに少し逆らうようにするのだ。それをストップさせないように問題の体の部分があなたの手に沿って動くようにさせるのだ。治療位置にすぐそこまでというところになると頭蓋仙骨リズムが突然に止まるだろう。支えている体の部分が、この突然のストップが起きたところを越えて動かないようにする。そこで留まるとちょうど“カチッとはまる”ような感じがするだろう。そこがリリースの起こる“治療位置”なのだ。

こういう素早い繰り返しの動きが起きた時は、患者の中のそれぞれの部分が葛藤を起こしているのだと私は受けとめている。一つの部分が“さあこの厄介もの(エネルギー嚢)を追い出そう”といい、もう一方は“そっとしておこう、騒ぎたてることはないよ”といっているのだ。セラピストのあなたは、患者の前者にエネルギーを合わせ“この厄介者を追い出したければ、私が今すぐその手伝いをしますよ”と患者に語りかけるのだ。

次に“治療ポイント”まであと一步なのだが…という感じがするときには、私の考えでは患者の非意識がセラピストのあなたの真剣さと腕をテストしているのだ。真剣さテストというのは、あなたが野生のカモの後を追いかけ、そのカモが材料の中からおいしいところをくわえ放なさないように見届けるだけの忍耐と覚悟があるかで行われる。腕をテストするとは“エネルギー嚢”が出てきてその中身がリリースし始めたときに、あなたがその問題と結果をどう処理すべきか知っているかどうかを試すということだ。つまりは患者の非意識が、あなたがどう出てくるかを試しているのだ。

## II. ソマト・エモーショナル・リリース(S.E.R.)

ある日に起こったS.E.R.のセッション内容を書き表すのは至難の技だ。というのも、毎日毎日、そのプロセスが違うからだ。昨日書いたことは、今日はもう時代後れなのだ。私は毎日違ったプロセスに接するごとに、新しいことを教えられている。

S.E.R.のプロセスということに関しては、二つの推論というかモデルが私の頭から離れない。これを紹介することで、みんなのソマト・エモーショナル・リリースの概念が展開し、成長するための役に立つことを願っている。